

沖打ちの バラケとグルテンの セツト釣り

最近の傾向

新べらの放流直後や日並の良いと、また平日などは、好条件のため魚の活性も良く、比較的小めの竿で釣ることができる。しかし、警戒心の強い大型魚や混雑時などは今まで攻められていないエリアに魚が溜まる傾向があり、そのような状況時にこのバラケとグルテンを用い、沖めを狙う「バラケ沖打ち」が有効だ。寄せながら釣り込む釣りの

ため、釣り自体はセツトの組み立てとなり、バラケエサの重要性は高い。そして、くわせエサのグルテンもタイプにより開き方が異なるため、両者への反応を見ながら調整するようになる。また、下ハリスの寸法も重要で、比較的長めのハリスセッティングとなるが、数センチ単位での微調整も求められる。

年内位までの好活性時には、バラケもタンゴエサに近いタツチが良く、くわせエサのグルテンもバラケ性のあるものを使用し、ハリス寸法も上10cm、下30cm程度で反応する。しかし、厳寒期になるに従い、くわせエサへの反応も弱くなることから、バラケエサはボソ気味となり、グルテンは繊維のしつかりとしたハリ持ちの良いタイプが有効になる。ハリス寸法もサワリを手エックしながら延ばす方向で合わせていき、時には上15cm、下50〜70cm位のセッティングになることもある。



竿 16~21尺
ミチイト 0.6~0.8号

ハリス
上0.4~0.3号、
下0.3~0.2号

ハリ 上5~6号、下3~4号

ウキ
ボディ(羽根寸)
10~12cm

板オモリ
一点付け

注意点 竿は、沖目狙いとなることから、そのフィールドで使用可能な最長尺数をまずはセレクトする。特性としては、軽量タイプが適しているが、時には小ウキを使用することもあるため、操作性の良いものを使い勝手も良い。ミチイト0.6~0.8号、上ハリスは絡みを防ぐために0.4号を基準にし、下ハリスは食い渋り気味ならば0.25号位まで細くすることもある。ハリは、上エサを持たせ気味にする場合、ふところの深いものが良い。特徴的なのは使用するウキで、どうしても沖目にウキが立つため、目盛りの刻みも大きめのほうが判断しやすい。ただし、上ハリスを張らしてからゆっくりとグルテンの重さをウキにかけながらの落ち込みを狙うときには、ムクトップのウキが適している。

パターン 1

ペレット系のバラケ

バラケマツハ200cc +
スーパーダンゴ200cc +
水150cc + ペレ道150cc



+



+



+



くわせエサ

わたグル
40cc +
水50cc



+



エサの作り方 「バラケマツハ」「スーパーダンゴ」に水を注いで、一旦ドロドロ状態にする。そのまま数分間放置してから「ペレ道」を入れて全体に大きくかき混ぜる。「ペレ道」は吸水に時間がかかるため、最低でも10分以上そのまま放置

する。その後は小分けにしなが押し練りを加えてなじみ幅の調整をする。基本的にはしっかりとトップいっばいの位置までなじませる。くわせエサの「わたグル」は、繊維を活かしきるためにフタ付き密閉容器でのシェイク仕上げ。

●釣り方&エサ使いのコツ

パターン は、型モノをタナに落ち着かせながら釣るセツトの釣りに最適で、糞系統のエサとペレットの組み合わせになる。昨年くらいから顕著にこの傾向が見られ、一旦糞系統のエサで仕上げて、「ペレ道」で締めることでタナまでは開きにくいバラケができるようになった。

狙うエリアに入ってから膨らみバラけるため、小さい魚をタナに入れることなく型モノだけを寄せられる。しっか

りとなじみ幅が出て、ジワジワとウキが返される途中でカチツと明確なアタリが出るため釣りやすい特徴もある。

エサのできあがり直後はヤワしつとりに仕上がるが、10分程度放置することで全体に締まり、再度その段階で大きくかき混ぜて後は押し練り程度で良い。これがこのエサの特徴のため、十分に時間をかけて仕上げるのがコツとなる。

くわせエサは、「わたグル」の単品で、グルテン繊維を生

パターン 2

ボソタイプのバラケ

ダンゴの底釣り夏70cc +
新B200cc +
底バラ100cc +
バラケマツハ100cc +
水100cc

くわせエサ

いもぷに
40cc +
水50cc



+



+



+



+



+



エサの作り方 「ダンゴの底釣り夏」、「新B」、「底バラ」、「バラケマツハ」に水を入れ、一緒練り。仕上がりはカタボソになる。圧の加減でなじみ幅は調整するが、バラケ性と魚を寄せるパワーは強い。くわせエサは「いもぷに」40ccに水50ccのシェイク仕上げ。

オモリ量とエサの大きさ

エサ
実寸大



くわせエサのサイズ
直径5～7mm



〜



バラケエサのサイズ
直径12～15mm



〜



オモリ
実寸大

オモリのサイズ
15mm × 17mm ~
17mm × 20mm

かすためにフタ付き密閉容器で仕上げる。先にグルテンを入れてその後水を注いで、フタをして5〜6回シェイクする。できあがったグルテンは若干手もみをして小さめにハリ付けする。サイズは7mm程度で良い。

パターン は、厳寒期の待ち気味の釣りに適したエサ使用で、バラケエサは硬くボソツと仕上げるタイプではないため、一緒練りで仕上げるエサなので、カップで正確に量り、



一旦放置した後にもう一度全体を大きくかき混ぜることでエアーム含まれ、ボソツ気が増進する。

くわせエサのグルテンは練ることで待ち釣りに最も対応可能な「いもぶに」が適している。前記と同じシエイク仕上げて、その後手水を打ちながら100回位しっかりと練り込み、ヤワヤワタッチまでやわらかくする。硬めからヤワにした場合、グルテンの繊維が塊となってハリのフトコロに残るため、食い渋り時にも強いくわせエサとなる。

バラグルの沖打ち こんな時どおする？

Q3

カラツンの 対処法を 教えて？

A³

ウキが立ち上がり、その直後の強いアタリで“カラツン”が出る場合には、バラケエサにあたっているケースが多い。バラケエサのタッチが硬ければやわらかく、逆にやわらかければ硬いタッチにすることでクリアできる場合がある。

また、上ハリスの寸法を短くすることで反応が弱くなる。なじみ幅が出てそこからのカラツンの場合は、下ハリスの寸法が長過ぎることが考えられる。数センチ単位で詰める微調整が必要になる。

Q1

モヤモヤという
サワリだけで
食いアタリが
でないのですが？

A1

良い感じでサワリが出ているがその後の食いアタリが出ないときは、くわせエサのグルテンがハリ持ちしていないことがある。特に、大型魚が多いフィールドでは、魚の煽りでグルテンが型崩れしてハリ抜けしてしまう。そんなときには、グルテンを硬めに作り直して小さくしっかりハリ付けると明確なアタリが出る。

タナの微調整も有効で、そのようなウキの動きのときには30cm位タナを上下させると、いきなり型モノが飛び込んでくることがある。警戒心の強い大型べら特有のサワリなので、タナの調整も有効になる。

Q2 エサ打ちしても
サワリやアタリが
少ないとき

A2

魚の量が少ないのか、興味を示さないのか、色々なことが考えられるが、とりあえずは下ハリスを延ばす方向でウキの動きをチェックする。そして、この釣りの場合はエサの打ち込み場所も工夫が必要で、“振り切り”“落とし込み”をすることで好反応を示すことが多い。ウキの動きが悪いときには振り切りで目目にエサを落とし、アピールすると良い。